しピット類は他と同様の貯蔵穴域内に営なまれる。より南の段丘崖寄りの部分に多いと見ることもでき、先に指摘した傾向が末だ継続しているとも考えられる。

後期以降の種類はピット類のみで、しかもその数が極めて少なく小型化し、かつその形態もAタイプやEタイプを主とするという前代までとの顕著な相違を示す。これは別にふれてあるとおり岩手県内全県的な傾向に一致するものであり、中期末以降の各種の原則変化を示唆するものとして記憶さるべきであろう。晩期にEタイプが主体をなす点には既にふれたが、本遺跡に限らず、晩期の浅いピットには、土器等が存在する例が多い。その器種を見ると、注口土器、台付鉢型等のものを含み、貯蔵機能を必ずしも想定させないものである。したがって、晩期の浅いピット類には貯蔵穴以外の機能、たとえば信仰関係のそれを想定することもできよう。晩期の貯蔵穴と思われるものは、前代までと同様にフラスコ状をなすものである。ただしその規模は顕著に小型化している。

以上をまとめると、①遺構（とくに大型住居とピット類）の占地をみると、南部により新規のものが多くなることからすると、北部→南部へと利用地区が動いていったことが知られる。

②大型住居跡とピット類の関係を見ると、前期末・中期初頭の両期には、大型住居の周囲に近接し、かつその長軸縁辺に沿ってピット類が配されていた可能性がある。なお大型住居内(屋内）にピット類が付設されていたか否かについては記録を欠く故に確言できない。前期末の遺物を出土するピットが同期の大型住居と重複している例は存在するので、その可能性は皆無ではない。

③大型住居やピット類は、集落内でそれが構築される地域が限定されていた可能性がある。前者は二期のそれが大略類似地点を占地している点、二期のそれぞれに重複・拡張の事実が見られる点などにあらわれている。後者はピット（貯蔵穴）域ともいうべき形で集中的に営なまれ、その密集現象は、中期初頭に始まっている。

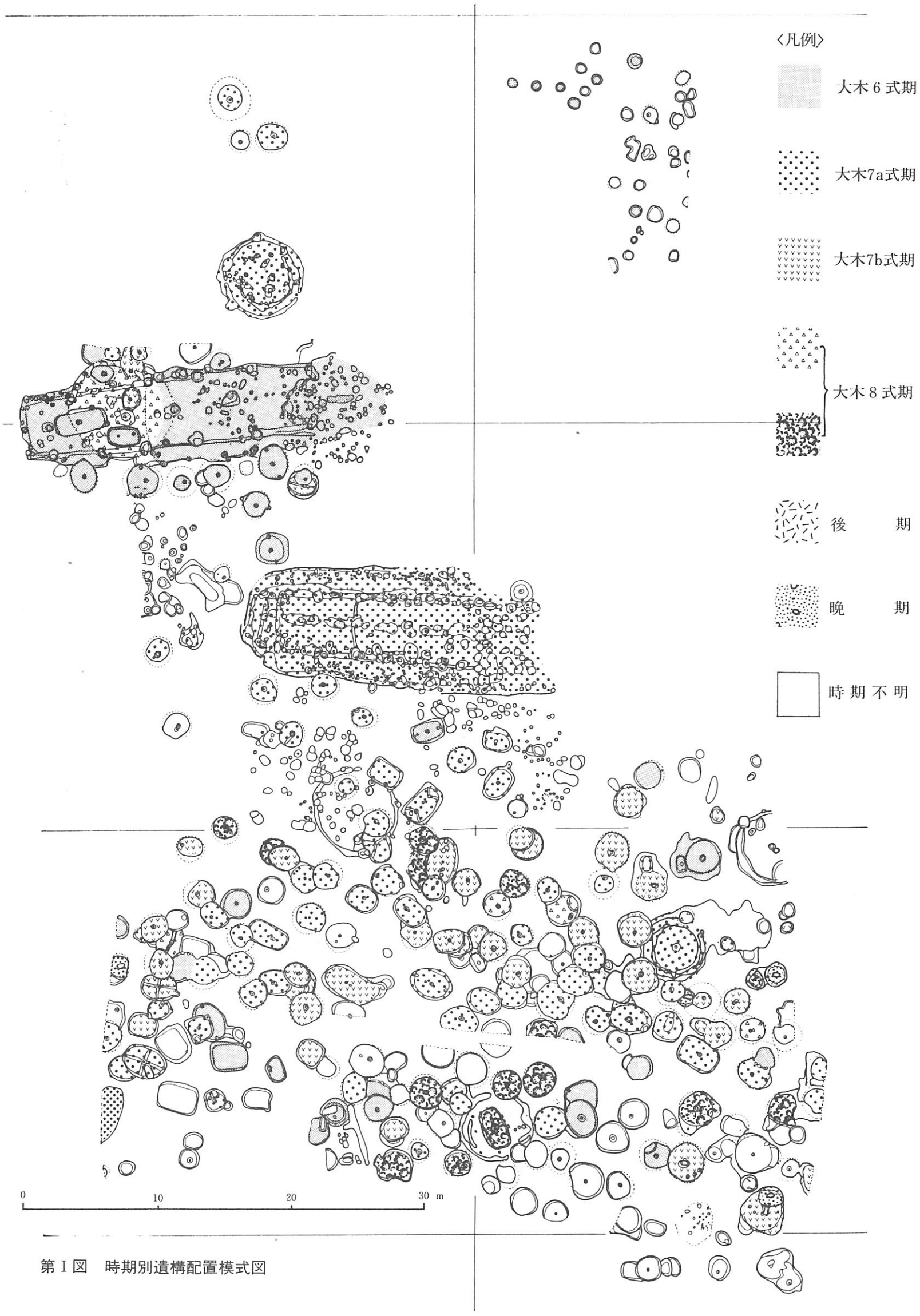
④前期末のピット類に占地の異同（平担部と斜面裾部）があり、それが形状異同に対応し、両者の機能の異同を反映している可能性がある。

⑤通常規模の住居の占地は地形に沿った平担部周縁に多い点以外の詳細は不明である。とりわけ南部の貯蔵穴域内に分布する住居の時期を決定できないことは、遺憾である。

⑥遺物包含層は北端部近くの北東面斜面に形成されている。二次堆積のためにその性格の判断には慎重であらねばならないが、各期のものが混在している事実は、包含層形成の地点（あるいはその原因をなす投棄の行為が行なわれる地点）も他と同様に各期を通じて限定されていた可能性がある。

(b)　所謂大型住居跡について

(1)　所謂大型住居跡の岩手県における検出は本遺跡（鳩岡崎）を端緒とするが、その本報告未刊のうちに数多くの類例が知られるようになり、現在までのところ16遺跡の例が蓄積された。



第Ｉ図　時期別遺構配置模式図

さらに既往の調査例の中にもその可能性あるものが含まれるので、大略20遺跡前後がその数となろう。それらの一部をあげると大略以下のようになる。

①早期　二戸市長瀬Ｂ遺跡、②前期前半　二戸市中曽根・松尾村長者屋敷の２遺跡、③前期後半　松尾村野駄・同長者屋敷、江釣子村鳩岡崎の３遺跡、④中期前半　二戸市荒谷Ａ・一戸町馬場平Ⅱ・安代町荒屋Ⅱ・松尾村長者屋敷・雫石町塩ヶ森・江釣子村鳩岡崎の６遺跡、⑤中期後半　軽米町叺屋敷・松尾村長者屋敷・盛岡市繋Ⅲ・都南村湯沢の４遺跡、⑥後期　北上市丸子館・同八天の２遺跡、⑦晩期　安代町曲田Ⅰ・松尾村寄木の２遺跡。

以上の他にその可能性を指摘されているものに、盛岡市大館町・紫波町西田・石鳥谷町大地渡の各遺跡（いずれも中期中葉）、大迫町観音堂遺跡（中期後半）、松尾村釜石環状列石などがあり、さらに金ヶ崎町千貫石No３の１遺跡で、重複と報告されている例にその可能性を認めることもできる（中期前半か）。(註３)

このように岩手県においては所謂大型住居は、早期中葉以降（吹切沢式併行頃）から晩期前半ごろまで連綿と存続し、かつその分布を見るといずれも内陸部に限定されていることが知られる。岩手県内陸地方に存在する地形区分等を若干考慮して整理すると、中曽根・荒谷Ａ・馬場平Ⅱは馬渕川流域（叺屋敷も同様に見做しておく）、荒屋Ⅱ・曲田Ⅰは米代川流域、長者屋敷・野駄・寄木・釜石環状列石は竜ヶ森分水領以南地域、塩ヶ森・繋Ⅲは雫石川流域、大館町は雫石川流域であるが、より北上川水系に近い地域（北上川流域と見做されるべきか）、湯沢・大地渡は北上川中流域のより脊梁山脈沿いで、支流水系（葛丸川など）沿い、西田・八天は北上川水系直近の地帯、丸子館・鳩岡崎は支流水系の和賀川の南北岸、などに分布する。観音堂は同様に支流水系沿いであるが北上川東岸に位置することになる。内陸地方では北上川水系の上・下流の両地域に類例を欠く。今後の検出に期待すべきものと考え、現時点での解釈はひかえる。今後は地域区分をも念頭においた整理も必要とされよう。

いずれにしても上記の二項目をこの種遺構の特色の一つとして指摘しておく。

(2)　所謂大型住居跡の変遷

先に示した大型住居跡の分類とその変遷については、既に三浦謙一・高橋文夫両氏の予察、中村良幸氏の研究発表などによって、一定の見通しが与えられている。(註１)ここでは各氏の業績に導びかれつつ、そのあらましを整理する。(註２)まず中村氏は住居跡の形態と炉跡の形状を指標とし、次の基準を設けた。即ち①住居跡の形態　Ａ、隅丸長方形・隅丸台形（樽形）Ｂ、長方形・長楕円形、Ｃ、円形・卵形・多角形、②炉跡の状態　ａ、屋内に炉の痕跡が無い、ｂ．屋内に複数を有する（地床炉・石組炉共）、　ｃ．屋内に一箇しかもたない（同前）、というもので、さらに①・②の組みあわせは６つに大別でき、Ａ－ａ；早期（長瀬Ｂ）、Ａ－ｂ；前期前半（長者屋敷他）、Ｂ－ｂ；前期前半～中期後半（塩ヶ森・鳩岡崎他）、Ｂ－Ｃ；中期中葉　Ｂ・Ｃ－ａ；前期前半？～晩期（西田・丸子館他）、Ｃ－ｃ；中期末葉～晩期（八天他）となることを示した。

そしてこの６つのタイプは炉跡の状態からでも時期区分をすることができ、ａ－早期、ｂ－前～中期後葉、ｃ－中期末～晩期となる。住居跡の状態でもＡ－早・前期前半、Ｂ－前期後半～中期後葉、ｃ－中期末～晩期と区分できる。つまり、大型住居と呼ばれるものは時期的にＡ－ａ、Ｂ－ｂ、Ｃ－ｃの基本的な組みあわせでつくられ、事実上三区分されているようである、とした。

次に三浦・高橋両氏は若干くわしく述べている。即ち、早期；隅丸長方形で屋内炉をもたない。通常規模の住居跡と相似し、規模が主要な識別要素となる（長瀬Ｂ）。前期前半；異なる特徴のものが複数併存する。いずれも長者屋敷例である。即ち凸辺台形・樽形で、中軸線に沿って対になる形で配置される「定位置地床炉」をもつものと、長方形乃至長楕円形で、中軸線にを沿って複数の「定位置地床炉」が直線的に配置されるものの併存である。後者が所謂「ロングハウス」型である。通常の住居跡とは規模・形態・付属施設のあり方が大きく異なるものである。前期後半；所謂「ロングハウス」型のもののみであるが、長軸方向の規模には差がある。（長者屋敷・野駄・鳩岡崎）。中期初～前葉；形態に若干の変化がある。まず所謂「ロングハウス」型で所謂「ベッド状」施設を有するもの（鳩岡崎）と、やや楕円形気味の形態と、中軸線上に直線的に複数の炉がならぶもの（塩ヶ森・荒屋Ⅱ他）の２種がある。埋設土器を伴なう石囲い炉も出現する。中期中葉；長方形乃至楕円形の形態と、中軸線に沿って複数が直線的に並ぶ炉跡をもつ。地床炉のみのものと、埋設土器を伴なう石囲い炉も加わる例とがある（荒谷Ａ・長者屋敷・馬場平Ⅱ・繋Ⅲ）。中期後葉～末葉；形態・炉跡ともに大きく変化する。即ち、楕円形（一部に円形）が基本形態となり、炉の数は原則的に単基となる。この結果通常規模の住居との識別要素は規模のみとなる。また複式炉はこの時期に出現する（叺屋敷・繋Ⅲ・長者屋敷・湯沢他）。後期；楕円形の形態をもち、それに縮小化を意図した10回の建て替えが行なわれている。「壁柱」らしきものも見られる（八天）。晩期；円形の形態で、壁や張り出し部が礫によって構成される（寄木・釜石環状列石）。ただし礫の使用は大型住居に限定されるものではない。石囲い炉である。これらを体制上の変化で区分すると①早期、②前期前半～中期中葉、③中期後葉以降の三区分が可能で、①・③は通常の型の住居との相違は規模の面にのみ現われ、②では両者の間には構造上の相違が認められる。

大略以上のようにまとめ、最後に「（前略）「大型住居址」の変遷の過程を三区分できることは、各時期に共通する典型的な「大型住居址像」を描くことの困難さをあらわしているといえよう。（後略）。」と述べている。以上の指摘はまことに適切なものといえよう。

所謂大型住居跡の分類と変遷は以上の各氏の要約に尽きると思われ、ほぼそれに賛意を表しておく。今後この種の遺構の検討にあたっては、単なる規模のみならず、その属性の確認が不可欠ということになる。通常規模のものとまったく異なる属性を有するものと、単に規模の差の還元できるものを同列に扱いえないのは明らかである。いずれにせよ、従来大型住居なる汎称のもとにまとめられてきたものには、複数の性格のものが混在する可能性が強いことは留意

さるべきである。性格に関連して、同様の留意のもとに扱かわれるべき可能性をもつものに、紫波町西田遺跡で典型的に検出された「柱穴状ピット群」がある。これらもその規模、とりわけ柱のそれはまことに大規模であり、「大型」の範疇に十分含めうるものである。この遺構群は如上の「大型住居跡」とは異なり竪穴形式はとっていないと思われるが、その規模からして、同種のものと見做しうる。類例は八天遺跡にもあるらしい。前記中村氏の学史回顧でも指摘されているとおり、今後はこの種の遺構も「大型住居」の中に含めて検討されるべきであろう。最後者の柱穴状ピット群は、性格検討の突破口になしうる可能性が大であり、有効に活用されるべきであろう。

(3)　大型住居跡、とりわけ所謂「ロングハウス」タイプの性格について、

以下には所謂「ロングハウス」タイプの住居跡の性格についての諸説を見ておく。その前に前記中村氏によるこの種遺構の特徴・特異点(註4)の指摘を紹介しておく。

①　この種の遺構は東北地方北部で大木２式あるいは円筒下層ｂ式期に出現し、中期中葉から後葉には消滅し、最盛期は前期末葉～中期前葉である。

②　北陸地方では中期前葉に石組炉をもって出現し、中期中葉に規模が縮小する。

③　東北・北陸地方の内陸部に分布が集中し、日本海側の海岸に立地する例でも貝塚の量は極めて少ない。

④　小河川近く、あるいは湧水地をもつ台地・段上に多く立地する。

⑤　そのほとんどすべてに拡張又は建て直しを行なっている。前者は長軸線上の台地の中央方向に長く、後者はほぼ同じ場所に行なわれる。

⑥　炉跡は地床炉・石組炉を問わずいずれも長軸線上にほぼ一直線に並び、その使用が著しい。

⑦　住居の壁高の高いものが多い。

⑧　埋甕や特殊ピット、貯蔵穴状のピット、配石状（凹石・磨石）などの内部施設をもつ。

⑨　パン状・クッキー状炭化物を出土するものがある。

⑩　その周辺に多数のフラスコピットや中小の住居跡が作られるものが多い。

⑪　（大型住居跡を有する遺跡は）多くの土器・石器を出土し、石器類は前期においては、北方では半円状扁平打製石器、南方では磨石・凹石等が多く、利器は石匙が多いのが目立つ。

まとめとして内陸的様相を有すること、時期的変遷が見られること、炉の使用法に特色があること、パン状炭化物の出土等を重要点として掲げている。ここに指摘された諸点はまことに適切なものばかりであろう。本調査例も多くの点で一致しているのは当然である。なお⑤に関連して、高橋文夫氏も、その行為が単なる建て替え以上の意味を持とうとのさらなる指摘を行なっている。⑤は「ロングハウス」タイプに限らず後期の円形プラン（八天・丸子館）のものにも共通する(註4)内容でもある。

次にこの種遺構の性格についての仮説を見ると、まず渡辺誠氏の一連の業績がある。氏は縄

文時代の植物質食料・加工技術に関するテーマを追究し続けてきていることは既に有名であるが、その成果の一つとして、縄文時代の貯蔵穴と長方形大型住居に関する見解がある。註6にしたがいそのあらましを見ると長方形大型家屋址の問題と題する章において「（前略）長期保存という点では、地下茎・球根類よりも堅果類の方がはるかにすぐれている。そしてこの貯蔵場所は、乾燥した屋根裏こそふさわしい。近年東北日本の日本海側で相次いで発見されている長方形大形家屋址は、まさにこの好例といえよう。(後略)。」と述べ、大型住居跡堅果類の長期保存のための貯蔵場所・乾燥場所説というべき説を展開している。また貯蔵穴について「縄文前期から中期にかけて発達した定住的円形集落には、しばしば貯蔵穴が発見されている。しかしこれまで記してきさ堅果類には、長期保存という目的からみてふさわしくない。むしろ一冬分のための生貯蔵か、地下茎・球根類の貯蔵こそふさわしい。また千葉市加曾利南貝塚の貯蔵穴のように、クリの充満した例もみられるが、これは甘味を増すために翌春まで埋めておく民俗例と対比することができ、一種の加工法とみることができる。」と述べ、縄文前期から中期にかけての貯蔵穴に、比較的短期の利用期間を想定している。これは傾聴に値しよう。渡辺氏の立論の根拠は、堅果類のアク抜き技術を主とする民俗事例の検討・植生分布その他の検討を経た上で得られたものであり、興味深いものであろう。

渡辺氏の説の延長上にあると思われるものを前記中村良幸氏が述べている。氏も同様に植生分布(花粉分析によるその変遷を含む)、堅果類の食用化の民俗事例(アク抜きの過程における水さらし・火熱・灰汁などの重要性を指摘している）、石器組成土器形態等を総合的に検討し大型住居跡冬期間における堅果類のアク抜き作業等の共同作業場説ともいうべきもの述べた。そしてその成立と消滅への過程を次のようにまとめている。「(前略）東北地方北部は冷温帯落葉樹林と暖温帯落葉樹林の境にあたる堅果類の豊富な地域であった。冷温帯に属する堅果類の食用化を完全にし、その生産性を大型住居跡によって共同作業という形で増大させ、過酷な冬を乗り越えてきた。しかし中期中葉頃から本格化する低温化は大規模集団化した集落の維持を困難にさせてきた。(後略)。」さらに共同作業から個別作業への転換の見通しと、個々の住居(作業小屋）における労働の一施設として複式炉の性格を想定している。

新野直吉氏は、秋田県杉沢台遺跡に関連して次のようにのべている。「（前略）そして35棟の中で長径30m×短径9mの超巨大住居跡（調査番号SI07）と長径16m×短径6.6mの巨大住居跡（同SI06）とがあった。中には数個の炉があり、極めてよく用いられた痕跡を見せていて、数十人の人々の生活にたえる規模をもっている。中期以後にはすでにこのような大住居跡の調査例もあって、それは通常集落の集会場などに擬せられてきた。しかし、この巨大住居跡は時々集会になどに使われたものではなく、常時居住の用に供せられたものと認められている。(中略)。小さい住居は二人用と考えられ炉さえないものもある。あるいは夫婦用のものであったかもしれない。(後略)。」とし、通常住居説ともいえるものをのべている。

以上の他に集落の集会場説というべきものも古くから唱えられてきている。

これからの諸説の中では、渡辺・中村両氏の説が一定以上の説得力をもつものといえよう。本遺跡における遺構の組みあわせ—大型住居(その周囲に貯蔵穴を伴なった)、通常規模住居、貯蔵穴(域)、遺物とりわけ石器組成—断面三角形磨石・半円形打製磨石・磨石・凹み石等が優越し、石鏃等が少ない、などの諸特徴も、その背後に植物質食料の処理等の影をうかがわせるものである。ここではあくまでも現段階における一つの可能性として、堅果類と主とする植物質食料の処理・貯蔵施設をその性格として想定しておく。

最後に中村氏が指摘した共同労働（大型住居・複数炉）→個別労働（通常住居・複式炉）という図式に関連する可能性をもつ現象にふれておく。それは貯蔵穴の部分で既にふれた中期末葉以降の集落内における貯蔵穴のあり方の変化、即ち集落内に貯蔵施設域をもつものの他に、集中区域をもたず、個別の住居に附属するかのようなあり方を示すものも増加する点である。これと先の変化がいかに対応するかは今後の課題であるがあえてここでふれておく。

註1　三浦謙一；岩手県における「大型住居址」の変遷について、高橋文夫；岩手県「大型住居」系列住居址群時期別変遷概念図（代表例）

以上は「縄文時代検討会 テーマ、大型住居跡について　資料所収　1981年」なおこの資料には東北・北陸地方の大型住居跡の類例多数が示されている。筆者もそれに多くを負っている。

註2　中村良幸；東北地方における縄文中期社会の発展と崩壊——いわゆる大型住居跡と複式炉の関連を通して　岩手考古学会昭和56年12月例会発表要旨。

註3　胆沢郡金ヶ崎町千貫石・長根前遺跡　金ヶ崎町教育委員会　1973　P11

註4　「ロングハウス」なる話は既に民族学における用語として存在しており、それはたとえばマレーシヤ連邦サバ州（ボルネオ島北端部）などのかつての焼畑耕作地帯に見られる高床で、長軸20m以上の、竹床・竹壁、ニッパヤシの屋根の建物をさしている。その意義について下元豊氏は次のようにふれている。「(前略）私の滞在しているこの村はサバの北端、クダット地区にあるマトンゴン村で人口 500人ほどの村である。村といっても日本のように行政区分がはっきりしているわけではなく、丘と丘の間に点在する幾つかの集落が集まって村らしきものを作っているといった方がよい。本来はロングハウスが2、3カ所にあり、その付近のジャングルを切り拓いて陸稲、トウモロコシ、バナナ、タロ栽培中心の焼畑耕作を行なっていた。およそ5年から10年でそのロングハウスは放棄され、また別の場所へ移ってしまうというパターンを繰り返しており、当然村の人口移動がかなり激しかったことが想定される。（中略）ところが近年になり政府の指導でヤシ栽培が普及しはじめてくると、その管理のため住居の定着化が始まった。同時に土地の個人所有が起こり、それは焼畑用地の狭小化につながっていた。ロングハウスの成立要因の一つに焼畑耕作があげられることから、それはロングハウスの崩壊にもつながっていった。(後略)。」(下元豊　芋飯文化　シリーズ食文化の発見〔世界編〕1、粒食文化と芋飯文化、日本観光文化研究所編、柴田書店発行　1981年、P.155～156)

ロングハウスなる語には既に如上の対象と意義が存在するのである。したがって混乱をさけるためには別の名称を与えるべきであろうし、それは早急に実施さるべきであろう。ましてや所謂柱穴状ピット群に対してもロングハウスなる呼称が与えられつつあり、ロングハウスそのものの対象に変化が生じつつあることを考慮すれば、それは急務といわざるをえない。

註4　岩手県埋文センター文化財調査報告書第20集　東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書　松尾村長者

屋敷（Ⅱ）(財) 岩手県埋蔵文化財センター　日本道路公団　1981年
註5　渡辺誠　縄文時代の植物食　雄山閣出版　1975
註6　渡辺誠　縄文時代におけるブナ帯文化　地理　第26巻第4号古今書院　1981年所収
註7　高橋文夫　岩手県埋文センター文化財調査報告書第12集　東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書
松尾村長者屋敷遺跡（Ⅰ）(財) 岩手県埋蔵文化財センター・日本道路公団　1980年
註8　新野直吉　古代史上の秋田　さきがけ新書①　秋田魁新報社　1981年

(c)　ピット類の特徴について

ピット類の個別説明は既に遺構編において終えた。以下には特徴と思われるものの若干を示してまとめとしておく。なお以下の記述は、一定以上の規模を有し、かつそれ自身の特徴（形態その他）や伴出遺物の比較的明白なものを資料として採用したもののみによっており、あくまでも本遺跡における傾向・大勢を示すにすぎない。とりわけ堆積状況については、実測図を欠く例が多いことから、それが明白な例からの類推的なものである(A表)。

(a)、形態・属性　これについては別に示した分類基準に尽きるので再述はしないが、若干の項目についてのみ補足する。まず床面上に残存する施設に関しては、土器等の埋置例は存在しない。若干例に見られた床面上の凹みをその痕跡と見ることもできるが確実ではない。土器類の多くは、横転位で検出されたものが多いようである。この点は土器埋置例の多い関東地方などとの大きな差異であろう。

床面上の凹み、小ピット類、溝類の性格については、現在排水施設関連の機能が想定されている。本遺跡に見られたものにもその機能を果たしたものが存在したであろうことは十分に考えうる。(註1) しかし、壁がほぼ垂直に立ち上がる（A・B・Cタイプ）ものに見られる、とりわけ中央と両端部にそれをもつものについては、排水以外の何らかの機能、たとえば上屋構造に関連する機能などを想定したい。開口部周辺（外周）に小ピットを伴なうかのような例にも、同様に上屋構造関連のものの存在を想定しておきたい。

壁面上（天井部）に何らかの施設を有する例は存在しないらしい。開口部に何らかの施設、たとえば段状につくり出し（蓋をするかのような）た例も、確実なものは存在しない。後者については秋田県内にその類例が知られている。なお筆者らが調査した岩手郡滝沢村清水沢（しみずさわ）遺跡における空洞のままに検出されたフラスコ状ピットには（削土作業を実施した業者の話によると）板状の礫（石）が伴なったらしく、この種のものに蓋が付されていたことは十分に可能性をもつものであろう。なお清水沢例の底面・天井部には工具痕が残存した。底面のそれは放射状に残存し、興味深い。ちなみにその痕跡は巾5～7cm、長さ10～15cm程度のものが多かった(註2)

(b)　タイプ別個数　その形状が比較的明確なピット280前後を基礎として、各タイプ別の個数を見るとB表のようになる。その比率を見ると、A：B：C：D：E＝12.1：9.2：5.0：44.3